様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成　　年　　月　　日現在

機関番号：３０１０８
研究種目：基盤研究（Ｃ）
研究期間：平成２２年度～平成２４年度
課題番号：２２５２０６２４

研究課題名（和文）
小学校英語授業改善に向けた教師の認知研究：言語教師としての信条分析

研究課題名（英文）
A study on teacher cognition to improve English education in primary schools: Analysis of language teacher beliefs among Japanese primary school teachers

研究代表者
中村　香恵子（NAKAMURA KAEKO）
北海道工業大学・創生工学部・准教授
研究者番号：４０３４７７５３

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は，小学校教師がもつ言語教師としての認知を解明することにより，小学校英語教育の改善に資することである。課題解決のために，３回の質問紙調査による統計的分析と２回のインタビューや集団討議による質的分析を行ってきた。その結果，小学校教師のもつ言語教師としての認知の特徴と成長のプロセスの一端が明らかにすることができた。また小学校教師の言語教師としての認知や実践の変化に影響を及ぼしている要因の幾つかが示唆された。

研究成果の概要（英文）：The aim of this study was to investigate the features of Japanese primary school teachers cognition in language teaching in order to contribute to the improvement of English education in Japanese primary schools. Three questionnaires, two interviews, and group discussions were conducted. The result of the study revealed some features of language teacher cognition among Japanese primary school teachers and details about parameters which may affect cognition and teaching practice.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
平成２２年度	500,000	150,000	650,000
平成２３年度	500,000	150,000	650,000
平成２４年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総　計	1,500,000	450,000	1,950,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：言語学・外国語教育
キーワード：早期英語教育，教師認知

１．研究開始当初の背景

人はそれぞれ自分の経験に裏付けられた「学習」や「教育」に対する独自の信条(belief)をもっており、特に言語教育においては教師が「言語学習」や「言語習得」対してもっている教師信条(teacher belief)が授業での判断や行動に影響を与えると考えられている（Pajares 1992; Williams & Burden 1997; Freeman 2001; Borg 2003)。

本格的にスタートした小学校外国語活動であるが，理論的な枠組や政策側からの具体的な提示が十分ではないため，その実践は個々の指導者の経験に基づいた判断によって行われている現状にある(バトラー，2010)。さらに，小学校外国語活動の目的は，技能的な素地よりも情意的な素地の育成に重きをおいており，教師のもつ内面の特徴が無意識に子どもたちへ影響を与えることが考えられる。そのため，小学校英語教育を理解し，

改善するためには，「教師が何を考え，何を知っていて，何を信じ，何をしているのか」(Borg, 2006) という教師認知のあり方を知る必要がある。

これまでの教師認知研究において，学習者として自分が受けた授業や教師の影響(Ariogul, 2007; Lortie, 1975; Numrich, 1996; Olson & Singer, 1994; Wardford & Reeves, 2003)，教職教育における知識や経験の影響(Farrell, 2003; Flores, 2001; Jonson, 1994; Watson, 2003)，そして教師になってからの実践経験(Breen, Hird, Milton, Oliver & Thwaite, 2001; Tsang, 2004: Richards, Tung & Ng, 1992; Richards, Gallo & Penaandya, 2001; 秋田, 1992; 佐藤・他, 1990, 1991)) や学校文化とよばれるその学校あるいは学校種に独特な学校環境や文脈(Alexander & Dochy, 1995; Butler, 2005; Richards, Tung & Ng, 1992) などの要因が教師の認知や教育実践に影響を及ぼしていることが報告されている。教師認知教育はその範囲や中身において近年めざましく広がりと深まりをみせているが，日本における小学校教師を対象とした言語教師認知研究はまだ十分ではない。

小学校英語教育の主たる指導者は英語専科ではない学級担任であり，専門性や教育環境の違いから英語専科の教師とは異なった影響を受けており，その結果それぞれの言語教育に対する認知（意識）には様々な違いがあるのではないかということが予想される。彼らが，小学校教師たちが外国語を教えることをどのように学び，指導観や授業観をどのように変容するのかを知ることが求められる。

２．研究の目的

本研究の目的は，小学校教師がもつ言語教師としての認知を解明することにより，小学校英語教育の改善を図ることである。研究課題は以下である。

① 日本における小学校教師の言語教師としての認知の構造と特徴は何か。
② 日本における小学校教師の言語教師としての成長のプロセスはどのようなものか。
③ 日本における小学校教師の言語教師としての認知の変化に影響を与える要因は何か。

３．研究の方法

本研究では，質問紙を用いた量的なデータと調査目的にあったサンプリングによるインタビューや集団討議から得た質的データを混合して用い，統計的な検証と記述データの考察を繰り返し行うことにより，研究課題の解決をはかってきた。研究の流れを図１に示した。

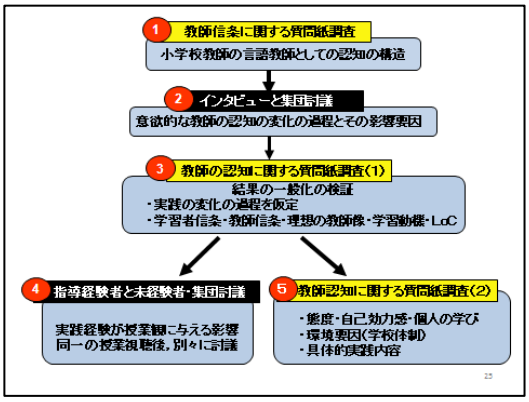

図１　研究の流れ

質問紙調査の分析には，時間的，経済的な制約から基本的に横断的研究手法を用い，経験や属性の違いによって教師を群化し，統計的な手法その群間の違いを比較したり，要因間の関係を検定してきた。また，質的なデータはデータベース発想法（藤沢, 1992）などの手法によりコード化とカテゴリー化によって解釈した。

４．研究成果

(1) 言語教師信条に関する質問紙調査

小学校教師（*n*=98）に対して質問紙による調査を実施した。教師の言語教師としての認知を測定するための質問紙（笹島・ボーグ 2009）の質問項目 33 のうち、小学校教師にかかわるもの 23 項目を用いた。

教師のビリーフあるいは認知の構造を探る手掛りとして、探索的に因子分析を行った。さらに、経験の違いによる認知の構造や変化のプロセスが異なると推定されるので、教師の経験によってこれを群化し、その群間の因子得点の平均を比較した。因子分析（最尤法，プロマックス回転）の結果，６因子を得た。一元分散分析により経験の違いによってグループ化されたグループ間の因子得点の平均を比較し，95%信頼区間を調べた。

その結果，英語指導経験ありの群に「基礎重視」の傾向が見られた。また教師経験が少ないほど「指導技能」が重要だと考えているが、逆にベテランになるほど「教師の主たる仕事は生徒の人間形成である」と考えている傾向が見られた。英語力においては，英語が苦手な教師ほど「指導内容」を重視する傾向があることが示唆された。

(2) インタビューと集団討議

上述のアンケートによる結果を補完し、認知の変化とそれに影響を与えている要因を探るため、意欲的に外国語活動に取り組んでいる教師に対して半構造面接と自由討論による調査を行った。被験者は小学校外国語活動の研究会の中心となって活躍している３名の小学校教師である。

① 半構造面接による調査

これまでの英語学習や英語指導における個人的な経験について，半構造化面接を行った。３名に共通して、自身の学習者としての経験は良いイメージがなく、現在の自分の実践に影響を与えてはいないと考えていた。一方で、全員が塾などの学校外の英語学習で成功体験を得ていた。そしてその成功体験による自信や達成感、楽しさが彼らの初期の授業に影響を与えていることが分かった。

また，英語指導に関しての個人的な歴史が客観的に語られた中で、英語指導の実践に影響を与えてきたものが抽出され、３つのレベルに分類された。(1) 社会環境にかかわる要因(地域的な状況、政策、研修会など), (2)職場環境にかかわる要因(学校規模, 子ども、同僚、研究体制など) ，(3) 個人的要因（おかれた環境や他者のアドバイスをどう受け止めて行動するか等)。

② 自由討論による調査

自由討論では、研究者の先入観や誘導を排除するため、教師になってからの実践や考えの変化を参加者の一人が司会者となり参加者同士が自由に語り合った。分析の結果、今回の３名の教師が話題にしたものは７個のカテゴリーに分類された：授業、英語学習、学習者、学級経営、自分自身、地域環境、学校環境。

ここで教師認知をモデル化した Borg (2006)では説明されていない要因のひとつは「学級経営」の視点である。「外国語活動」をクラスの子供たちが自信をつけるひとつの機会と考えたり、人間関係を構築するために役立てたり、学級経営のバロメーターと考えていることがわかった。これは、質問紙調査から抽出された因子「人間形成重視」にかかわるものであり、小学校教師に特有のものであると考えられる。

授業を軸にそれぞれの教師の英語活動に対する考え方の変化をまとめた。その結果，ベテラン教師の２名に同様な変化の過程が見られた。初めは，環境の変化や校内における立場からやむを得ず取り組み始め，自己流の実践をしていたが，同僚や研修会における他者の実践を取り入れるうちに，自分なりの指導を身につけ，自信をもって授業ができるようになっていった。しかし，実践を重ねるうちに，子どもの姿から，教師 A は「楽しいだけでいいのか？」という疑問をもち，教師 B は文字を手掛かりに英語を理解している子どもがいることに気づき，文字を扱わないという現在の英語教育の在り方について否定的な考えをもつに至っていた。こうした変化は若手の教師には見られず，ベテランが子どもの成長という視点で英語活動を見ているのに対して，若手の教員は自分の教師としての成長という視点で見ていることが読み取れた。

さらに，教師の認知の変化に係わっていると思われる要因として経験だけではなく，教師の置かれた教育環境要因や個々の教師がもつ個人的要因などが推定された。

(3) 教師の認知に関する質問紙調査１

前述の結果をうけ，質問紙調査を実施した(n=103)。教師の実践の自律的段階を仮定した質問項目７つを作成した。さらに，上述の先行研究から得られた結果をもとに，教師の言語教師認知を構成している要因として，教師としての信条，言語学習者としての信条，の他に言語習得信条，言語学習動機を加えた質問紙を作成した。また，教師の成長の過程に影響を及ぼしていると考えられる要因として，自分の置かれた環境をどう受け止めるかという「統制の所在（Locus of Control）やそれをどう具現化するかという理想の教師像といったものも関与しているのではないかという仮説のもとに先行研究から質問紙を作成した。

① 自律的実践

自律的実践項目を主成分分析した結果 self-regulated と material-oriented の２成分が検出された。self-regulated 因子に英語力や英語基礎学力重視傾向がかかわっており，若手に material-oriented の傾向があることが示唆された。しかしながら重回帰分析からは，その他の要因は自律的実践に対する大きな影響が見られなかった。

また，教師の自律的成長の段階の違いにおいて，特に教師信条における「指導技能」「生徒との関係」「教材」に対する考えに違いが見られた。しかしながら，教師信条の変化に比較して学習者信条にはあまり変化がみられなかった。

② 教師信条

因子分析（最尤法，プロマックス回転）の結果６因子を得た。これは研究の第一段階で行った教師信条への因子分析で得た因子とほぼ一致するものであった。

第１因子「指導技能重視」においては，英語指導経験の有無によって異なった特徴があることが推察された。英語指導経験のない教師に「指導技能重視」の傾向が見られ未知の実践に対する不安の表れと解釈できた。逆に，英語指導経験のある教師に指導技能を重視しない層が増えており，小学校英語教育を実践していく中で，英語指導に教師の指導技能は重要ではないと感じる教師が増えるということを示している。これは，特別な外国語指導の技能がなくても英語の授業ができ

たという経験とによるものではないかと思われる。

第 2 因子「指導内容重視」においては，どのグループ間においても違いが見られなかった。この因子は「文法習得大切」「英語は正しく言えるまで使わないほうが良い」などといった言語習得観にも関連しており，そうした信念は学習者としての経験から培われたものであると考えられる。この因子は経験や教師の成長の度合によって変化しないことが推測された。

同様に第 3 因子「関係重視」と第 4 因子「人間形成重視」5 因子「教材重視」においてもグループ間の有意な差は見られなかった。これらの因子は，この結果は担当する学年の特性によっても影響されるのではないかと考えられる。児童の発達段階の特性に応じて，低学年ではまず生活習慣や学習規律の定着や人間関係づくりが重んじられ，また高学年においてはより知的な学習活動が重んじられると考えられる。

第 6 因子「基礎重視」においては，英語活動指導経験の有無，英語力，自律の段階の 3 要因において違いがみられ，最も変動しやすい因子であることが推察された。英語指導経験がある，または自律した実践をしている教師に「基礎重視」のばらつきが大きく，実践により教師の考え方が「語彙や文法構造」といった基礎知識を重視する層とそれを重視しない層に 2 極化する傾向にあるとも予測された。

また，英語力への自信の度合いは，学習者としての経験に影響されていると考えられ，ここでも学習者としての認知が教師認知に影響を与えていることが示唆された。

③　理想の教師像

理想の教師像に関する質問項目 73 のうち，平均が極端に大きいもの（15 項目）を除外した後，因子分析行った。削除した 15 項目は小学校教育において求められる教師の資質に関わっている項目であると推察された。因子分析（最尤法，プロマックス回転）の結果４因子を得て，それぞれ「人間性重視」「指導力重視」「生徒との関係重視」「教養ある授業重視」と解釈された。

基本属性によって教師をグループ分けし，それぞれの因子の平均点を比較したところ，性別，総合的な学習の時間の指導経験の有無，己申告による英語力（得意，普通，苦手の３群）において，どの因子にも有意差は見られなかった。しかし，外国語活動指導経験の有無によって比較したところ t 検定において第１因子「人間性」において有意差が見られた。95%信頼区間の重なりから群間に平均値の差はないものの，標準偏差からばらつきの差異が認められ，両者において「指導経験あり」と「なし」のグループでは違う特徴があることが示唆された。つまり，外国語活動指導経験のない教師がやや「教師の人間性を重視」する傾向があるのに比べて，指導経験者はそれを重視する人としない人に分かれていくのではないかと推測された。

また，教師経験年数によって世代を初任，中堅，ベテランの３群に分け一元配置分散分析によって比較したところ第３因子「生徒との関係」において有意差が見られた。95%信頼区間からは平均値の差が認められなかったが，多重比較にから初任の方が中堅・ベテランと比較して生徒との関係の良い教師を理想と考える傾向があることが示唆された。

④　学習者信条

学習者信条の質問 40 項目について，平均が極端に大きいものと小さい項目（4 つ）を除外した後，因子分析（最尤法，プロマックス回転）を行った。その結果 5 因子が抽出され，それぞれ「実用性重視」「理念重視」「指導者重視」「学習法重視」と解釈された。

学習者信条のこれらの因子が理想の教師像に影響を与えているかを調べるため，学習者信条因子を説明変数，理想の教師像因子を目的変数とする重回帰分析を行った。

その結果，実用的な英語を学びたいと考えている「実用性重視」は教師の人間性や生徒との関係，教養ある豊かな授業を重視し，最も教師の理想像に関わりがあることが示唆された。また「英語学習は他の学問と異なる」「日本語は使わない方がいい」といった英語学習のあるべき姿を重視する教師は，教師の授業力を重要と考え，また「指導者を重視」する教師は教師の人間性や教養あふれる豊かな授業内容が大切であると考えていることも示唆された。一方，「学習法」を重視する場合は理想の教師像に影響がないことがうかがわれた。

⑤　外国語学習動機

外国語学習動機に関する質問 33 項目から，平均に天井効果が見られたもの（１項目）と床効果の見られたもの（４項目）を除外した。削除された項目から，全体として内発的動機が低いと見ることができた。一方，天井効果があったものは「英語学習は将来よい職業につきたいから」という 1 項目のみであった。

言語学習動機に関する質問項目 33 について因子分析（最尤法，プロマックス回転）を行った結果，4 因子が抽出された。外国語学習動機因子を説明変数，理想の教師像因子を目的変数とする重回帰分析を行った。

その結果，「非動機」の因子には理想の教師像に影響がなく，行動の理由が外部にありややしかたなく学習しているといった段階の「外的調整」因子は教師と生徒との関係を

重視することが示唆された。さらに行動の理由は自己の内部にあるがまだあこがれの段階である「取り入れ的」因子には人間性や教養ある授業を重視する傾向があり，自らの価値観に基づいて英語を学習したいと思う「同一視的調整」因子には教師の人間性に対してマイナスの影響をもつことから，取り入れ調整的と同一視的因子の間に理想の教師像に対する何らかのギャップがあるのではないかということが示唆された。

(4) 英語指導経験者と未経験者の比較

英語指導経験による教師の授業観の変化をより明らかにするため，英語指導経験者と未経験者（計６名）に同一の授業を視聴し自由に感想を述べあう集団討議を実施した。すべての発話の１文毎にキーワードをタグ付けし，経験者と未経験者が授業の何に注目するのかを抽出した。さらに，それに対してどのような解釈をしているのかに関して，グループごとの参加者に共通する一般的な特徴を記述した。その結果，小学校教師の外国語活動に関する授業観の特徴として，以下の点が抽出された。

・教師たちは定型的な授業の枠組みをもっており，外国語活動の授業に対してもそうした枠組みに沿って思考，判断している。
・「子供理解」「子供中心」といった小学校で重視されている特徴が，外国語活動の授業観にも表れている。
・小学校教師としての授業観ともに，研究会などといった教師集団の中で形作られ共有された授業観がある。

また，外国語指導経験者と未経験者の外国語活動に関する授業観の違いとして以下の点が示唆された。

・外国語指導経験を積むにつれて関心が指導技術から指導内容へ変化する。
・外国語指導経験者は学習者の内面や情意面により目を向けている。
・外国語指導経験者は言語教師としての視点で，未経験者は担任教師，小学校教師としての視点で外国語活動の授業を見ている。
・外国語指導経験者は授業に関して注目する点がより焦点化されている。
・外国語指導経験と小学校教師経験の両方をもつ教師に，より内省による言語教師としての成長の過程が見られる。

(5) 教師の認知に関する質問紙調査２

教師の認知や実践への影響をさらに明らかにするため，再度質問紙調査を実施した。(n=106)上述の質問紙に加えて，態度・自己効力感・環境要因を加えた質問紙を作成した。さらに具体的実践に関しても先行研究から小学校外国語活動の実践に適するものを採用した。現在データを分析中である。

これら一連の調査により，小学校教師の言語教師としての構造や成長のプロセスやその影響要因を明らかにするための貴重なデータを得ることができた。これまでの研究から得られた小学校教師の認知の特徴は，論文や学会での口頭発表だけではなく，小中高の教師による研究会での講演や小学校と中学校の教師を対象とした小中連携に関する書籍によって公表してきた。

今後は得られたデータから理論の構築を目指したい。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 10　件）

① 萬谷隆一，志村昭暢，中村香恵子，宮下隼，小学校外国語活動の成果に対する中学校英語教師の意識調査，小学校英語教育学会 JES Journal，査読有，第 13 号，2013，135-149.

② 中村香恵子，長谷川聡，志村昭暢，小学校英語授業改善に向けた教師の認知研究：小学校教師の言語教師としての認知の特徴を探る，日本児童英語教育学会 JASTEC JOURNAL，査読有，第 31 号，2012, pp.99-114

③ 志村昭暢，中村香恵子，日本人小学校教師と中学校・高等学校英語教師の言語教師信条の比較，日本児童英語教育学会 JASTEC JOURNAL，査読有，第 31 号，2012，pp.23-40

④ 中村香恵子，小学校教師の抱く理想の外国語教師像：言語学習者信条と外国語学習動機とのかかわり，大学英語教育学会 JACET Language Teacher Cognition Research Bulletin, 査読あり, 第２号, 2012, 29-44.

⑤ Kaeko Nakamura，Satoshi Hasegawa，How cognition in language teaching change during primary school teacher professional development，JACET 51st International Convention Proceedings，査読有，2012，235-239.

⑥ 中村香恵子、志村昭暢，小学校教師における言語教師としての認知研究：小学校英語活動に意欲的な教師の経験と学びから，大学英語教育学会　JACET Language Teacher Cognition Research Bulletin，査読有，2011，第１号，58-72.

⑦ Kaeko Nakamura，Satoshi Hasegawa，What they think and believe: Elementary school teachers' beliefs as a language teacher，

JACET 50th International Convention Proceedings, 2011，432-436. 査読有，

⑧ 萬谷隆一，中村香恵子，石塚博規，沖縄の小学校外国語活動および小中連携事業についての調査報告，北海道教育大学小学校外国語活動研究紀要, 査読なし, 2011, 第 6 号，pp.104-119.

⑨ 中村香恵子，志村昭暢，日本人小学校教師の英語教師としての信条調査，北海道工業大学研究紀要，査読有，2010，第 38 号，5 – 12.

⑩ 萬谷隆一、中村香恵子、神林裕子、中村邦彦，小学校教師と中学校教師の潜在意識の違い：授業ＶＴＲ視聴後の討論プロトコルの分析を通じて，日本児童英語教育学会 JASTEC JOURNAL, 査読有, 2010, 第 29 号，17 – 29.

〔学会発表〕（計 12　件）

① Kaeko Nakamura，The effects of increased teaching experience on cognition transformation: A mixed method of study of Japanese primary school teachers，The 3rd International Conference on Foreign Language Learning and Teaching, 2013/3, Bangkok, Thailand.

② Kenta Sugawara 他７名３番目，Toward a self-based understanding of willingness to communicate among Japanese learners of English，北海道英語教育学会，2012/10，札幌

③ Kaeko Nakamura，A mixed method research on language teacher cognition of Japanese primary teachers，hird Pacific Rim Conference on Education，2012/8，Sapporo, Japan.

④ 中村香恵子・長谷川聡・志村昭暢，外国語学習者としての小学校教師：小学校英語教育における教師認知研究，第３８回全国英語教育学会愛知研究大会口頭発表，2012/8，愛知

⑤ 萬谷隆一・中村香恵子・志村昭暢・宮下隼，外国語活動に対する中学校教師の意識調査，第１２回小学校英語教育学会千葉大会口頭発表，2012/7，千葉

⑥ 中村香恵子・志村昭暢，外国語活動指導経験者と未経験者の授業観の比較研究：小学校教師における言語教師認知研究，第１２回小学校教育学会値が大会，2012/7，千葉

⑦ 中村香恵子，小学校教師の英語教育に対する信条に影響を与える要因の探索，大学英語教育学会教師認知研究会第６７回研究発表会，

⑧ 中村香恵子・長谷川聡・志村昭暢，小学校教師の言語教師認知研究：モデル化と質問紙の作成，第３７回全国英語教育学会山形研究大会，

⑨ Kaeko Nakamura，How do teachers' experiences affect their teacher beliefs: Japanese primary school teachers as language teachers，th British Association of Applied Linguistics (BAAL) Language Learning and Teaching SIG Conference，

⑩ 中村香恵子・長谷川聡，小学校英語授業改善への示唆：小学校教師の信条分析，北海道英語教育学会第１１回研究大会，

⑪ 中村香恵子，小学校教師認知研究：小学校教師の信条分析，第３６回全国英語教育学会大阪大会，

⑫ 志村昭暢・中村香恵子，日本人小学校教師と中学校教師の言語教師信条の比較，第１０回小学校英語教育学会北海道大会，

〔図書〕（計 1 件）

① 『小中連携 Q&A と実践：小学校外国語活動と中学校英語をつなぐ４０のヒント』萬谷隆一・直山木綿子・卯城祐司・石塚博規・中村香恵子・中村典生（編著）東京：開隆堂出版。共著

６．研究組織

(1)研究代表者

中村　香恵子（Nakamura Kaeko）
北海道工業大学・創生工学部・准教授
研究者番号：40347753

(2)研究分担者

萬谷　隆一（Yorozuya Ryuichi）
北海道教育大学・教育学部・教授
研究者番号：20158546

石塚　博規（Ishizuka Hiroki）
北海道教育大学・教育学部・教授
研究者番号：50364279

(3)連携研究者

長谷川　聡（Hasegawa Satoshi）
北海道医療大学
研究者番号：50265104

笹島　茂(Sasajima Shigeru)
埼玉医科大学
研究者番号：80301464

(4)研究協力者

志村　昭暢（Shimura Akinobu）
旭川実業高等学校

小山　俊英（Koyama Toshihide）
旭川市立北光小学校